

法華經と仏塔崇拜

さて、大乘仏教一般で仏塔の崇拜が盛んになったことは先に述べましたが、法華經ではどのように仏塔について教えられているのでしょうか。

法華經は仏塔について随所に述べられており、四信五品抄ではその法華經のご文を引用して、末法の修行のしかたを教えてください。すなわち、四信五品抄において此の經の本意は「一向に南無妙法蓮華經と称せしむるを一念信解初随喜の気分となすなり。是れ則ち此經の本意なり。」

と述べられ、ただひたすら、南無妙法蓮華經と上行所伝の御題目を唱えさせるのが一念信解、初随喜という末法の私達信者の位にふさわしいことであり、これが法華經の本意であるとされます。さらにこれは、ただ、御祖師様の独断的な解釈ではなく經文にその証拠があることをあげられて

「經に云く、『須く我がために復た塔寺を起て、及び僧坊を作り、四事以て、衆僧供養することを須ひざれ』と。此の經文明らかに、初心の行者に檀戒等の五度を制止する文なり。」

と、法華經では、同じ仏教教団でも法華經以外の仮の教え（権教）や迹門の教えを奉ずる人々のために仏舍利を奉安する塔（stupa）を建てたり、僧坊をつくり衣服、飲食、湯薬、臥具などを衆僧に供養することをとどめていることをあげておられます。それというのも、法華經ですすめる塔供養と法華經以外の大乗經典等ですすめる供養の方式は全く違うからなのです。そのことは、特に法師品第十に説かれています。これについては後で述べます。

また、法華經には「見宝塔品第十一」というようにその品の題として、塔の名前が使用されており、ここにも他經とは異なった塔觀が述べられています。平川博士は「法華經には仏塔供養を随所に説いており、特に仏塔供養によって成仏できると述べている点に特色がある。法華經が仏塔信仰と密接に結合していることは、これによって明

らかである。」(講座大乘仏教4所収『大乘仏教における法華経の位置』春秋社)と記されていますが、私達のご信心にも従って意識はしていませんが、法華経の仏塔信仰の伝統が受け継がれています。最初に、宝塔品の粗筋とそこに出てくる塔について、まずふれます。

見宝塔品について

法華経の見宝塔品第十一は法師品第十の後の章ですが、話の都合上さきに述べます。塔について法師品で大事な説示が行われてその後、突如、七宝よりなる多宝塔が出現するのです。その多宝塔は地より湧き出して空中にとどまっています、高さは五百由旬、縦横(縦広)は相応して大きく二五〇由旬あるのです。由旬というのはサンスクリットのヨージャナ(yojana)という距離の単位で、帝王の一日の行軍の里程であり40里、30里、16里、5里と言うように異説がありますが、5里としても五百由旬で2500里となり、いずれにしても法華経の御法門を聴聞している人々の前にまことに壮大な、華麗な宝塔が出現したのです。その一番上は四天王宮に達するほどとされます。当宗の碩学、泉日恒上人は「高祖の御本尊に四天王が顕されているのはこの法華経のご文に関係があるのであろう。」とされています。

さらにお経文には

「種々の宝物を以て之を莊校せり。五千の欄楯あって龕室千万なり。無数の幢幡以て嚴飾となし、宝の瓔珞を垂れ、宝鈴万億にして其の上に懸けたり。四面に皆多摩羅跋梅檀の香を出して、世界に充滿せり。其の諸々の幡蓋は金、銀、瑠璃、磲磔、瑪瑙、真珠、玫瑰の七宝を以て合成し、高く四天王宮に至る。」とあります。(開結3
23頁)

欄楯というのは手すりでも残っている仏塔の欄楯には見事な彫刻を施しているものがあります。龕室というのは壁などを開けて仏、菩薩の入られる部屋で、仏像などを安置する厨子も後に龕室といわれるようになりました。それが一千万もあり、様々

な無数の装飾具で飾られ、宝鈴によって素晴らしい音が聞こえ多摩羅跋（タマーラ tamāla）樹や梅檀（チャンダナ candana）樹で作った香ぐわしい香がたかれ、旗や幡矛は金、銀、青い瑠璃や碑磔（美しい貝）、瑪瑙、真珠、玫瑰（赤色の火珠）で作られているという、宝石の塊のような宝塔が現われて目映いばかりです。七宝焼というのがありますが、それが天然の宝石でできあがっているわけです。そして、天上からは曼陀羅華がふり注ぎ、天人達が華や香、音楽で宝塔に供養致します。

その時、宝塔の中から、大きな声で「善いかな、善いかな、釈迦牟尼世尊はよく、平等の大慧、菩薩を教える法、仏の護念される妙法華経を大衆のために説かれた、説かれるとおり、その通りである。釈迦牟尼世尊の説かれることは、皆真実である。」と聞こえてくるのです。

仏の舍利が祀られているはずの塔、つまりお墓が地の下から現われたことすら不可思議であるのに、そのうえ、大きな声でしたので大衆は驚き、皆立ち上がり、敬い、合掌して退いたのです。

そして、その大衆の中から大衆説菩薩という方が、

「世尊よ、どうしてこの様な宝塔が現われ、中からみ声がするのでしょうか」

と、問います。それに対して、釈尊は

「この宝塔の中には、如来の全身がいますなり。」と答えられ、続けて

「太古に東方に宝浄という国があり、そこの仏がおられ、名を多宝といい、菩薩であった頃に誓願をおこされた。『もし私が、仏となり、滅度した後、法華経を説くところがあれば、わが塔廟はこの経を聴くために、その前に涌現して、その真実であることを証明し、讃えて善いかなといおう』と。そして、多宝仏は滅度に臨んで、『わが全身を供養しようと思うものは大塔を起さなくてはならない。』といわれ、そして、神通力と願力によって法華経が説かれる時、ありとあらゆる国々に塔とともに現われたもうのである。」

と、いわれ多宝仏はその昔に爾前経（法華経以前の教え）は説かれたが、法華経を

説かれずに入滅されたため、いま、菩薩であったときの誓願を果たすために法華經を聴き、声を出して真実の証明をされたのであると疑問を解かれたのです。

その後、大樂説菩薩は

「では、その多宝仏のお姿を見て拝みたく思います。」と言います。

これに対して、

「多宝仏には深重の願があり、その通りに実行されなくてはお姿を拝むことはできない、それは『もし、多宝仏の塔が法華經を聴くために諸佛のみ前に出る時、わが身を四衆の人々に見せようと思えば、法華經を説かれる仏の分身の諸佛がそれぞれの世界で法を説かれているのをことごとく一処に集め、その後に出現しよう』という願である。大樂説よ、それほど望むのであれば、わが分身の諸佛を集めようではないか。」と言われます。

宝塔の中には多宝仏の全身が在るので、それに対応する釈迦仏も全体で対応しなくてはならないのです。法華經を説かれる釈尊の分身として、様々な仏が種々の名前でそれぞれの世界で、その国の風俗や習慣に従い、人々に適応する法を説いておられるのですが、それらの仏は法華經を説かれる釈尊に統一されることによって、ようやく多宝仏はお姿を現すことができるのです。

ここで、多宝仏という方は、すでに入滅を終えられた仏で法身仏といい、宇宙の真理そのもの（理身）をさし、釈迦仏は修行をして悟りを開かれた報身仏（智身）を表わすとされています。

そして、あらゆる国々から分身の諸佛が菩薩をお供として伴って次々と宝塔の前に遊行してこられます。そうすると、この娑婆世界は瑠璃の浄土となり、宝樹で莊嚴し黄金を縄として道を区切りました。来集の諸佛は宝塔の前に座られ、いつのまにか、浄土となった娑婆世界に諸佛が一杯に集まられても、それでも集まられる仏が尽きることがないので、その周囲の二百万億那由陀の国まで浄土と化して、分身の諸佛の座を設け、これを三度繰り返して、一大浄土が現出したのです。（三變土転さんぺん

どでん)

来集した分身の諸佛は、侍者を遣わして、釈尊のご機嫌を伺わせ、さらに宝塔を開き多宝仏を拝したいことを告げます。

釈尊は、その旨を聞かれて、座より起たれて虚空の中に、つまり空中に浮上をして留まられると、一切の人々は起立、合掌して一心に仏を見つめます。

そこで、釈尊は右指で七宝の塔の戸を開かれました。

そうすると、大衆は多宝仏が宝塔の中で獅子の座に座し、全身生きておられるお姿で禅定に入っておられる様子を拝し、またもや大きな声で

「善いかな、善いかな、釈迦牟尼仏は快くこの法華経を説きたもう。われはこの法華経を聴かんがための故に、すなわち、ここに来至せり」

と、いわれます。

その時、四衆ははかり知れないほど遠い過去に滅度をされていた仏のこのお言葉を聞いて、未曾有のことだとほめ讃え、宝華をお二方の上に散じます。

そこで、多宝仏は、宝塔の中で半座を分かって、釈尊の座られる場所をあけて、「釈迦牟尼仏よ、この座に就きたもうべし」とすすめられるのです。

釈尊は中に入られてその右の座に座して、結跏趺坐をされます。結跏趺坐というのは、よく座禅の時に用いている座り方です。

これを見て、大衆は「仏はあまりにも遠く、高くに座っておられて拝めない。どうか、神通力によって、私たちも空中に上らせていただきたい」とお願いします。

こうして、さらに法華経の虚空会という一大スペクタクルが展開をしまいいりますが、このお二方の仏様が並んで座られたことを「二仏並座」といいます。

これには、教義の上で種々の解釈が行われていますがひとつには境智冥合といって、釈迦仏は智仏といい能観（悟る主体）の智慧を表わし、多宝仏は境仏で所観（悟られる）の境（理、真理、悟りの内容）を表わし両者が一体となったことを表わすとされます。また、釈尊は報身であり、多宝仏は法身であり、多宝塔の中で並座されるのは

法身と報身が一体となっている姿で、さらに大地に居られる分身の諸佛を応身といい、その三仏が一処におられるのはこの仏の三身が即一身であることを表わすとされています。

また、布施浩岳博士は「法華経成立史」を著して、宝塔涌出、二仏並座の意味を現代仏教学的につぎのように説明をしています。

二佛並座説法の儀式は舍利身の活仏なるを表示して、一応は古き舍利塔を止揚すると同時に、塔中の説法は多宝如来の証明と相まって舍利即法なるを意味し、再転して舍利即法身即経典とその意味が展開する。即ち釈迦仏の入塔説法の実実は法華経成立已前の古き舍利塔を称揚すると共に、その裏面においては経典中心の制多の価値をも称揚せるものに他ならぬ。

(同書 285 頁)

ここで、舍利塔というのは釈尊の遺骨を安置した塔、即ち塔婆 ストゥーパをさし、制多というのは経典を安置した廟 チャイトヤを示すことは前に記しましたが、宝塔品では両者を結び付けているという意味です。そこで、この両者の関係をもっと端的に区別をした宝塔品の前の法師品でどのようなことを説いているか見てみる必要がありますが、その前に法華経全体で、塔について述べている箇所をあげてみましょう。

その他の品における仏塔

法華経も迹門と本門では天地水火の違目があるといわれ、同じ法華経といっても二経とも解釈できるといわれているようにその説相に相違があります。しかしながら、法華経には迹門、本門を通じて終始仏塔のことが取り上げられています。

まず、序品第一(第一章)には釈尊が無量義処三昧に入られて此土(この世界)にも他土(他の仏の教化されている世界)にも仏の説法にふさわしい瑞相が現われ不思議なことが起り、特に仏の眉間にある白い毛(白毫)から光が出て(放光瑞)上は天

界から下は地獄界までの世界がパノラマのように見られます。そうすると他土において仏が説法し、比丘や比丘尼、優婆塞、優婆夷が修行し得道し、菩薩が菩薩の道を行じ、諸佛が涅槃された後に仏舍利を以って七宝の塔を起てるのが見えると説かれてあります。（法華経開結 6 1 頁）

七宝の塔というのは金、銀、瑠璃、碑磔、瑪瑙、真珠、玫瑰 [まいえ 赤色の玉（火珠）] の七種の宝石で飾られた仏塔のことをさします。

また、方便品第二においては

諸佛が滅度された後に、その遺骨を供養するために何万億種という色々な塔を起て七宝で飾り、或は石の廟を作り、栴檀（香木）や沈水（熱帯産の香木、沈香）木櫛（白檀に似て像を作るのに適する木）及び瓦や泥土をもって起てる人もある。もしくは、広野の中で土を積んで仏の廟を作り、また童子が戯れにも砂をあつめて仏塔を作ること、これらの人々はすでに仏道を成じているのであると説いています。（開結 1 1 2 頁）

また、

「若し人散乱の心に塔廟の中に入って一たび南無仏と称せし皆已に仏道を行じき。

（開結 1 1 4 頁）

と、説いており、塔に対する信仰が中心で一遍でも南無佛と唱えることにより成仏が可能と説いてあります。

さらに、授記品第六では大迦葉、須菩提、大迦旃延、大目犍連の四大声聞（四人の大弟子）の授記が説かれ、将来かならず成仏してこういう名前の仏になると釈尊にお約束をいただくのですが、大迦旃延と大目犍連は八千億の仏を供養して仏の滅後にその舍利を供養し、塔廟を起て莊嚴して供養することによって「菩薩道を具し、当に作仏を得べし」と説かれるのです。ですから、ここにおいても菩薩の行としての仏塔の崇拝がはっきりと説かれていることになります。

また、堤婆達多品も塔の供養が説かれています。堤婆達多は釈尊の従兄弟で最初は

弟子となっていました。しかし後に、マガダ国の太子であった阿闍世とはかり、一方は父の王であるびんばさら王を亡きものとして王位を奪い取り、片や堤婆達多は自ら新仏となったことを宣言して、仏教教団を分裂させたのです。彼は仏教教団史上希有の極悪人として地獄に堕ちたとされ、小乗仏教のみならず大乘仏教においても決して成仏することはないとされていたのですが、この法華経ではじめて成仏を許されたのです。釈尊はその昔、ある国の国王として法を求めて大乘の教えを説く人を探しておりましたが、そのとき現れたのが阿私仙人でありその仙人こそ、堤婆達多の前世の名前であったというのです。堤婆達多こそ善知識であり釈尊が悟り等正覚を得させてくれた恩人というわけで、その功德によって、天王如来という名前の仏となったと説かれています。

「時に天王仏般涅槃の後、正法世に住すること二十中劫、全身の舍利に七宝の塔を起てて、高さ六十由旬、縦廣四十由旬ならん。七宝の妙塔を礼拝し供養せん。」

(開結 347頁)

また、本門に入っても如来寿量品第十六において舍利供養という言葉が出てきます。寿量品では、釈尊はシャカ族の王子としてシュッドーダナ王とマーヤー夫人の間に生まれて、ヤショーダラ妃と結婚して一子、ラーフラをもうけ、その後19才で出家、12年の修行を経て30才の時にブダガヤーの菩提樹のもとで悟りを開かれて仏とされたものと信じられていましたが、実はそうではないと説かれるのです。方便の教えとして、そのように説いては来たが、実は五百万億塵点劫という計り知れないほどの過去において悟りを開かれていたのであり、無量無辺劫を過ぎていて更にそれに先立ちやはり、永く菩薩道を行じておられたのであると明かされるのです。そして、成仏してより已来、甚だ大いに久遠であり、その寿命は常住で不滅である、たとえ涅槃の姿を見せて滅することはあるけれどもこれは、方便であり、衆生の心に喉が渴いたときに水を求めるように仏を求める渴仰心を起こさせるための方便であると、いわ

ゆる永遠の過去に悟りを開かれ、永遠の未来にわたって衆生を救済する無窮の生命をもった「久遠の本仏」の事実が明かされるのです。

そして、以上の教説をまとめて最後に法華経の中でもいちばん有名な自我偈という詩文（偈頌）が説かれるのですが、その中に

為度衆生故 方便現涅槃
而実不滅度 常住此説法
我常住於此 以諸神通力
令顛倒衆生 雖近而不見
衆見我滅度 廣供養舍利
恤皆懷恋慕 而生渴仰心
衆生既信伏 質直意柔瞽
一心欲見佛 不自惜身命
時我及衆僧 俱出靈鷲山

（開結 4 2 6 頁）

等と、説かれていて、人々はみ仏の滅度されるのを見て廣く舍利を供養すると述べられてあります。

さらに、神力品第二十一にも起塔供養の功德について説示されています。この部分は妙講一座の中にも「以要言之」で始まるご文として「神力品」のお経文とは別に収められています。

この部分は、法華経の受持を特に勧められたところで、園の中でも、林の中でも、樹のもとでも、僧坊であっても、在家の家でも、殿堂の中でも山や谷、野原でも「是の中に皆、塔を起てて供養すべし」と出ています。

（開結 5 0 3 頁）

そして、なぜそうするのかといえは、法華経の経巻・・なかんづくその魂である上行所伝の御題目をお祀りした塔を起てれば、もう、一般の仏塔、即ち、釈尊の誕生地、

成道の地、初転法輪の地、般涅槃の地、四大聖場に起てられているような舍利を奉じた仏塔を建立する必要はなく、そこに仏が生まれ、阿耨多羅三藐三菩提（無上等正覚最高の悟り）を得て、法輪を転ぜられ、そこで涅槃に入られるからであると当宗の宗義に関わる大事な教えを説かれているのです。この部分はこれから述べる法師品の塔に関する説を受けたものといえるのです。

そして、法華経の本門八品の教えが終わって宝塔が閉じられてから後は、法華経の本門の中でも、還迹流通分といって、内容的には迹門の教えに戻って仏様の亡くなられた後の正法、像法時代の人々のための教えが説かれますが、その最初の薬王菩薩本事品に日月浄明德佛が般涅槃された後、一切衆生喜見菩薩が

「仏の滅度を見て、悲感懊惱して仏を恋慕したてまつり即ち海此岸の栴檀を以てつばみとなして、仏身を供養して以て之を焼きたてまつる。火消えて已後、舍利を收取し、八万四千の塔を起つること三世界より高く、表刹莊嚴して、諸の幡蓋を垂れ衆の宝鈴を懸けたり。」

（開結 5 1 8 頁）

と、ここでは舍利塔の供養を取り上げています。

法師品で説かれる仏塔崇拜

以上、法華経の各品における塔についての記述を見ましたが、諸学者の説によれば、この法師品が境目で、法師品以前の各章では舍利塔・・ストゥーパの建立を勧め、法師品から後、神力品第二十一、嘱累品第二十二までは制多チャイトヤを起てることを勧めているといい、比重が塔供養から經典の受持に移っていくとしています。

このことは後に譲るとして、法師品ではどのように塔について述べているのでしょうか。

「薬王、在々所々に若しは説き若しは読み若しは誦し若しは書き若しは経卷所住の処には、皆七宝の塔（チャイトヤ）を起て極めて高広嚴飾ならしむべし。復舍利を安ずることを須（もち）ひず。所以はいかん、此の中に已に如来の全身います。」

と、仏舎利の安置を禁じて、経巻の安置をするところのチャイトヤの建立をはっきりと勧めているのです。

その後、「この塔（チャイトヤ）をばまさに一切の華香、瓔珞、繒蓋、幢幡、妓樂、歌頌を以て供養恭敬し、尊重讚歎したてまつるべし。若し、人ありてこの塔（ストゥーパ）を見たてまつることを得て礼拝供養せん。まさに知るべし、是等は皆、阿耨多羅三藐三菩提に近づきぬ」（開結 3 1 3 ~ 4 頁）

このご文には、経巻を安置したチャイトヤはすでにストゥーパと同等、もしくはそれ以上のものであるとの認識からあえて、ストゥーパと二度目は言ったという見解があります。

龍樹菩薩の大智度論には、「舎利には生身の舎利と法身の舎利があり、これに各々全身と碎身とがある」と説かれ生身とは仏の遺骨、法身とは仏心の舎利、経巻を示すとされます。

遺骨は釈尊をお供ひするものではあっても、それだけが仏様の残されたものではありません。すでに、形見の遺骨や遺物には仏様の魂はない、本当に仏を慕うなら、妙法蓮華経の経巻　なかんずくその魂である上行所伝の御題目、南無妙法蓮華経の宝塔を建立して礼拝せよ、そこに仏の全身が生きてましますのです。

遺骨がどんなに貴重だといってもそれは肉体のほんの一部を細かく砕いた一部分です。それに対して、妙法蓮華経の宝塔には如来（仏様）の全身がいます、あえて舎利は安置の必要はないと断言されているのです。

この法師品のご文が直接的に関連してくるのが、先ほど申しましたように神力品の起塔供養に関する経文と、四信五品抄で取り上げられている分別功德品における塔寺などの事供養の禁止のご文なのです。

ですから、法華経の法師品の前の品々や法華経以外の経典で勧める舎利塔の建立より、法華経の経巻の心髓の上行所伝の御題目を書写した制多である多宝塔の建立がす

ぐれているのであり、何よりその前で合掌し、題目口唱をする根本的な理供養こそ大事なので、それを宣言されるために四信五品抄は編述されたのです。

ついでにいうならば、私達の拝まさせて頂いている御本尊はいうに及ばず、御題目の書かれている御塔婆はこの真正の多宝塔に他ならず、そこにはみ仏が息づかれていますので、絶対に粗末にはなりません。

御祖師様は

「丈六のそとば（卒堵波）をたてて、其面に南無妙法蓮華經の七字を顕してをはしませば、北風吹ば南海のいろくづ（魚族）其風にあたりて大海の苦をはなれ、東風きたれば西山の鳥鹿其風を身にふれて畜生道をまぬかれて都率の内院に生れん。況やか
のそとばに隨喜をなし手をふれ眼に見まいらせ候人類をや。過去の父母も彼そとばの
功德によりて天の日月の如く浄土をてらし、孝養の人並に妻子は現世には寿を百二十
年持ちて、後生には父母とともに靈山浄土にまいり給はん事、水すめば月うつり、つ
づみ（鼓）をうて（打）ばひびき（響）のあるがごとしとをぼしめし候へ等云云。
此より後後の御そとばにも法華經の題目を顕し給へ。」

（昭定 1718 頁）

といわれています。

さて、以上、法華經の中での塔の崇拜のあり方、各品の中でどのように取り扱っているのかを概観しましたが、塚本啓祥氏は法華經の中に

遺骨塔（ストゥーパ）の建立、供養の勧奨

遺骨塔の供養の禁止、支提（チャイトヤ）の建立の勧奨

宝塔と如来の分身、多宝如来の舍利塔

の三種に区分できるとして、さらに、なぜ、いろいろな塔観があるのかということについて

「法華經の中に塔観を異にする内容が含まれているのは、異なった塔観を基盤とした信仰形態を反映した章（品）のグループが、法華經の中に包括されたことを意味す

る。」

(法華經の成立と背景 佼成出版社)

と、書かれています。

これは、法華經の成立に関わることで、法華經という經典はいろいろな経過をたどって複雑な成立をしたということの意味するのです。

参 考

諸仏滅度し已って、舍利を供養するもの、万億種の塔を起てて金銀及び頗璃、と瑪瑙、玫瑰瑠璃種とをもって清浄に廣く嚴飾し、諸の塔を莊校し 或は石廟を起て 梅檀及び沈水、木檜ならびに餘の材 甗瓦泥土をもってするあり。若しは曠野の中において土を積んで佛廟を成し、乃至童子の戯に沙を聚めて仏塔と為る、是の如き諸人等、皆已に仏道を成じき。若し人、仏の為の故に諸の形像を建立し刻彫して衆相を成せる、皆已に仏道を成じき。或は七宝を以て成し、鍮鈇及び赤白銅、白鐵及び鉛錫、鐵木及び泥、或は膠漆布を以て嚴飾して仏像を作れる、是の如きの諸人等、皆已に仏道を成じき。

(開結 1 1 2 頁)

「若し人散乱の心に塔廟の中に入って一たび南無仏と称せし皆已に仏道を行じき。

(開結 1 1 4 頁)

我、今、汝に語る、是の大迦旃延は当来世において、諸の供具を以て、八千億の仏に供養し奉事して、恭敬尊重せん。諸佛の滅後に各塔廟を起てて高さ千由旬、縦廣五百由旬ならん。金、銀、瑠璃、碑磔、瑪瑙、真珠、玫瑰、の七宝を以て合成し、衆華、瓔珞、塗香、抹香、焼香、繒蓋、幢幡を塔廟に供養せん。是の諸佛を供養し已って、菩薩の道を具して、当に作仏することを得べし。」

全く同じご文が大目犍連についても繰り返される。